

GWのダイビング・ディステーションとして
絶大なる人気を誇るフィリピン・トゥバタハリーフ環礁クルーズ。

2005年、2006年と2年連続取材を行った鍵井が
その魅力と素顔に迫る。

今回はキヤノン一眼デジタルカメラEOS-5Dで
海・陸の全ての撮影を行った。

フィリピン TUBBATAHA REEF, PHILIPPINES トゥバタハリーフ

GW期間限定
世界遺産クルーズ

水中カメラマン・鍵井靖章の航海日誌より



Photo & Text **Yasuaki Kagii**
Special thanks **World Tour Planners**

真っ青な海を渡って、ダイビングポイントへ向かう！

TUBBATAHA REEF, PHILIPPINES
www.web-lue.com

Web-lue 2006. Winter

 **Information Link**  情報HPへジャンプ
<http://www.wtp.co.jp/renewal/tubbataha/index.html>

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます



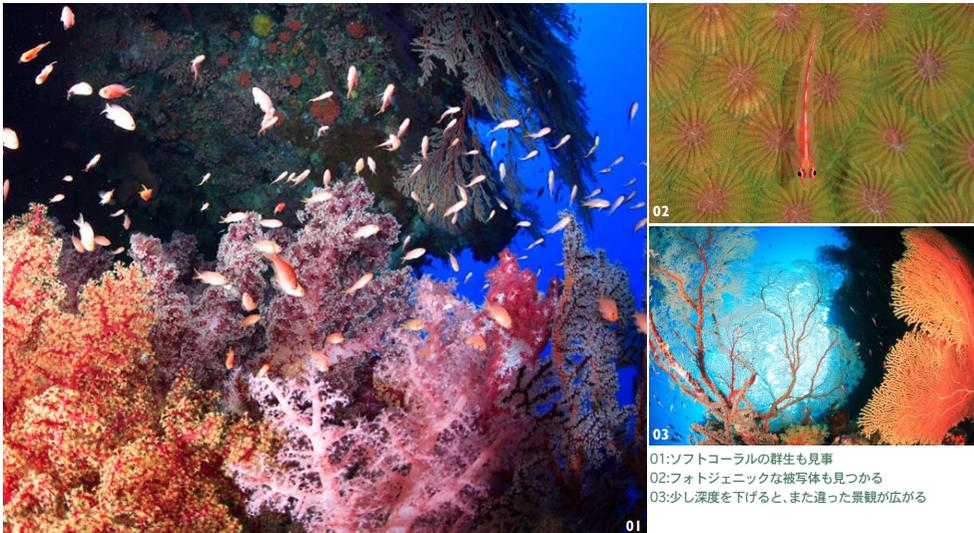
青く澄んだ海中で、
いきなりギンガメアジの大群に
迎えられる

ギンガメアジの大群はまるで雲海のように、迫力満点だった



豊かなサンゴ礁に群れるカラフルなハナダイの群れ。トウバタハリーフでは当たり前風景

大物との出会いを期待して海に飛び込む！



01:ソフトコーラルの群生も見事
02:フォトジェニックな被写体も見つかる
03:少し深度を下げると、また違った景観が広がる

乗船1日目 (4月30日)

国内線でプエルトプリンセサに到着後、今回乗船するアポエクスプローラーに乗り込む。ランチを海に見えるレストランで食べ、みんなで地元のスーパーへ向かう。30分間、自由に買い物の後、アポエクスプローラーに戻ってくる。お部屋で昼寝をする人、サンデッキで本の読む人、スピードボートでスノーケリングトリップに向かう人、それぞれの休暇の始まりを楽しむ。夕方6時にボートブリーフィング。フライドチキンやエビ、野菜炒めなどの夕食後、本船はトウバタハリーフに向かって出発した。

乗船2日目 (5月1日)

朝6時のモーニングコールで起きる。本船は一晚中、航海していた。プエルトプリンセサから約10時間の道のり。朝7時過ぎに1本目のダイビングを開始する。16名のゲストが2つのグループに分かれ、2隻のスピードボートに乗り込んだ。1隻のスピードボートはエンジンの調子が悪く、出遅れる。仕切っている現地スタッフのレイが「時間は守りましょう!」とブリーフィングで伝えたが、ボート側からこんな状態。のっけからフリピンススタイルだ。こんなアクシデントも含めたダイブクルーズの旅は始まった。

チェックダイブを兼ねて潜り込んだダイブポイントは「Shark Airport(シャーク エアポート)」の隣のポイント。砂地のポイントであるが、サンゴのドロップだった。それでもエントリーと同時に、ギンガメアジの大群に迎えられ、その後も、ネムリブカ、タイマイ、ナンヨウツバメウオの群れと出会った。良い滑り出しだ。

2本目のダイビングは10時半から。

今回は本当に「Shark Airport」にエントリーする。垂直に落ち込むドロップオフが続く。トップリーフには美しいサンゴ礁が続き、デバススメダイやキンギョハナダイが無数に群れる。ブルーウォーターではカスマアジの編隊や数匹のロウニンアジが泳ぎ、クマザサハナムロの群れを襲う機会を伺っている。別のグループは少し深場でギンガメアジの群れを見ていた。最後は砂地のエリアに着き、数匹のネムリブカを目撃した。

*

ランチを終え、潮の流れが早いということで、環礁の南にある「マラヤンレック」にポイントを変更する予定だったが、ゲストルームのエアコンが1台故障したため、出発が遅れた。

結局、3本目は「マラヤンレック」には行かず、「Seafan Alley(シーファンアレイ)」というサウストウバタハの北部のポイントでそのまま潜る。深度を下げるとウミウチワがたくさん連立している。その周りにはソフトコーラルやヤギの仲間が群生している。トップリーフのサンゴの美しさとはまた違った景観が広がる。これもひとつのトウバタハの魅力。イソマグロやロウニンアジの編隊が深場を泳ぎ去る。他のグループは毎ダイブ、カメラを見ているとのこと。僕のチームは見えていない……少し残念。

*

4本目のポイントは「Shark Airport」の南で潜る。タイマイやバラクーダ、ギンガメアジの群れ、ロウニンアジなどを見る。グループの後方で潜っていたが、ネムリブカがずっと私の後を付いてきているようで、奇妙だった。また、個人的にはデジタルカメラのマクロレンズを持ち込み、小さな生き物を探した。珍しい魚種を見つけることは出来なかったが、ウミシダやソフトコーラルなど私の好みの被写体は溢れていた。



01



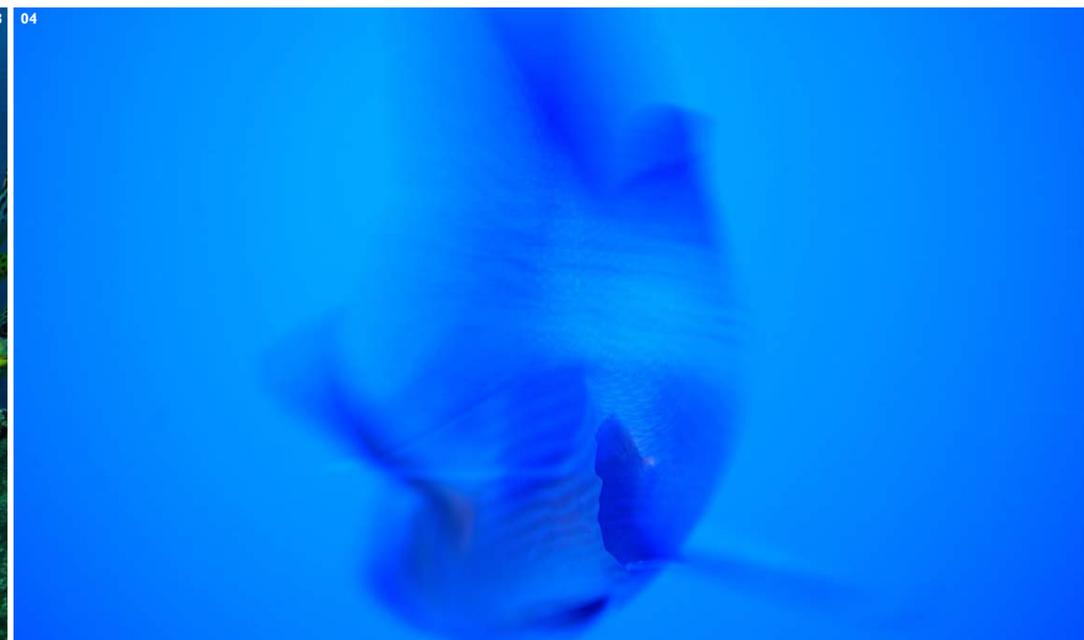
02

大物との出会いを期待して海に飛び込む！

01:みんな揃ってエントリー!!!
02:そして、青い海なかへ潜降を開始する
03:沈船ではアヤコショウダイの群れが出迎えてくれた
04:大きなバラフエダイが身を翻す



03



04

乗船3日目(5月2日)

朝6時のウェイクアップコールがあり、7時にはダイブデッキに向かう。

1本目のダイビングは「Malayan Wreck(マラヤンレック)」。沈船のポイントで水面から座礁した船の一部が見える。沈船のポイントということで、大きな船を想像していた。また、ガイドが「10分で沈船から離れます」と言っていたので、深いのかな?と思っていたら、水深6mほどの海底に鎮座し、朽ち果てた船体はとて小かった。それでも見所は、沈船を漁礁した魚の群れ。アヤコショウダイとチョウチョウコショウダイ、イスズミが群れ、ナンヨウツバメウオの姿もちらほら。魚まみれになった後は、ドロップオフに向かっ

た。見られた生物は川のように泳ぐギンガメアジの群れ、ネムリブカ、タイマイ、バラクーダの群れなど。エキジットの時、サンゴの隙間にいる小魚を狙い、微動だにしないナポレオンや求愛ディスプレイで婚姻色になったカンムリブダイの集団などを眺めていた。

2本目は「Malayan Wreck」から「Wall Street(ウォールストリート)」までダイビングする予定が、潮の流れが反対で、方向転換。見られた生物はネムリブカやタイマイ。潮の流れに翻弄され、30分過ぎにはトッブリーフに上がる。砂地にパッチリーフが点在している。ガイドはあまりマクロの生物を見せる技術がないようで、おのおのパディ単位で生物を探しながら楽しむ。サンゴの隙間に住むダルマハゼ系やハゼの仲

間、ガーデンイールなど。前回はそうだったが、ガイドのフィッシュウォッチングに対する意識が日本人とは違うので、このように大物を狙う以外のダイビングの場合、自分たちで海やダイビングを楽しめる人がトゥバタハリーフにはお勧め。

ランチの移動時間、本船からイルカの影が水面に見えた。

*

3本目、4本目のポイントは「AmosRock(アモスロック)」。本船をより南に移動させ、スピードボートでエントリーする。3本目は潮に乗りながら上手く進んでいったが(あまり記憶に残る生物との遭遇はならず)、4本目はまた、潮の流れに翻弄された。というのも、潮の流れる方角

が一定でなく、最初は潮の流れに乗って進み始めるが、途中から向かい潮になり、引き返すことになる。これは潮を読むガイドの能力に関わっているのかもしれない。カスミアジの大きな群れがドロップオフ沿いにやってくるが、その他、大物はバラクーダの単体のみ。大物の気配がなさそうならば、ドロップオフ沿いでマクロの生物を楽しむのが良い。この魚たちはダイバーが珍しいのか? 近くまでやって来てくる。目が合うとやはり逃げるが、また少しすると同じ行動を繰り返す。パラフェダイがそのような行動をしていたので、より印象に残った。2日目を終えて、ジンベイザメやマンタはまだ出現せず。明日は会えるのだろうか?

自分たちで海やダイビングを楽しめる人が
トゥバタハリーフにお勧め

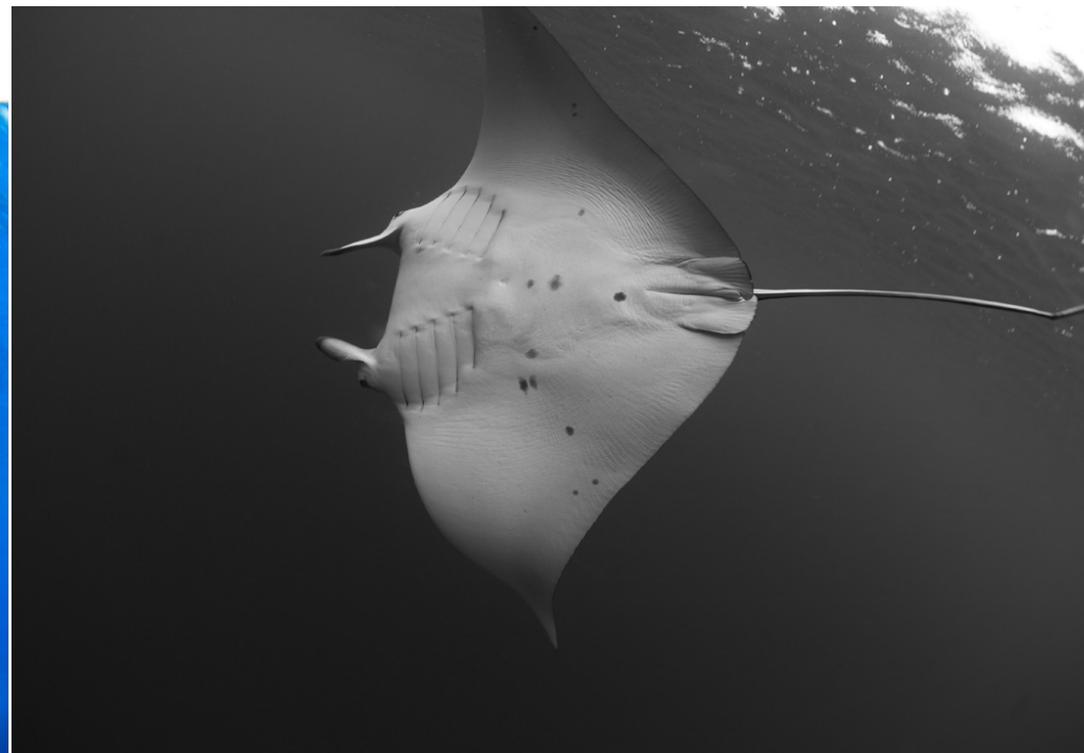
両手を広げて大海原をいくタイマイ

Day's 03
www.web-lue.com

TUBBATAHA REEF, PHILIPPINES
Web-lue 2006. Winter

Information Link <http://www.wtp.co.jp/renewal/tubbataha/index.html> click! 情報HPへジャンプ

©WEB-LUE ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます



左:水面が鏡のようになり、2匹のマンタを映し出す
右:目の前で何ターンしたマンタ、その美しさに心奪われる

待ちに待った！
大物マンタの出現！
身を翻しては
私たちに誘惑する

乗船4日目 (5月4日)

南トゥバタハに到着。1本目のダイビングは「BlackRock(ブラックロック)」。エントリーポイントに到着すると、マンタが水面を泳いでいた。すぐにエントリー。泳ぎ去るマンタを追いかける形となったが、念願の大物の出現に心躍る。水面下にマンタが映り、まるで2匹でランデブーを楽しんでいるよう。ヒレが水面の切り細波が残る。その後、ガイドはブルーウォーターの方に出て、ハンマーヘッドシャークを探すが、願い叶わず。

リーフの上でバラクーダの群れと遭遇した。また驚いたのは、十数匹のメジロザメの子供の群れが集団で泳いでいた。近くに行くことを許してくれなかつ

たが、それはかわいい光景だった。2本目のダイビングまでの間、マンタは本船の周囲に時折現れた。……と、この原稿を書いていたら、外がとても騒がしいので、デッキに出ると、もうすでにマンタとスノーケリングを楽しんでいるゲストがいた。慌てて入水したが、マンタはもうすでに遠くにいた。すぐに小型ボートに乗り込んでみんなでマンタスイムに向かった。青い水の向こうから現れるマンタは、口を大きく開けて捕食中だった。サイズは小さく、小回りを効かせて身を翻す。横で一緒に泳いだり、進行方向に先回りして待ったり、みんなで十分マンタスイムを楽しんだ。ただ、マンタたちが捕食しているであろうプランクトンのシーライズが多く、水着だけで泳いでいると身

体中刺されてしまうので、Tシャツやラッシュガードを着用することをお勧めする。それにしても、マンタの出現で船上は大盛り上がりだ。

2本目はガイドの判断で「BlackRock」のコーナーを挟んだ逆のリーフを流す。前半はドロップオフの壁沿いを行い、見られた生物はタイマイ、バラクーダの単体、クマザサハナムロの群れ、メジロザメの子供の集団といったラインナップ。エキジットの時に1枚のマンタで出会う。私の前で白い腹を見せてはまるで深海に誘うように胸鰭を動かす。2度水中で回転して消えていった。ボートが到着すると、その下でウメイロモドキの群れに囲まれた。



01

大物に会えることが当たり前になってくるクルーズの日常



02



03

04

- 01:メタリックなボディのバラクーダはとてもカッコ良く、迫り力もある!
- 02:獲物を狙うナポレオンとカスマアジ
- 03:豊かなサンゴ礁が永延と広がる
- 04:ダイビングの合間の、ちょっとした気遣いが嬉しい



ランチの後、本船をまた南に移動させ、ライトハウスという白い灯台の近くに係留した。3本目に潜ったポイントは、「Staghorn Point(スタッホーンポイント)」。

ギンガメアジ、バラクーダの群れも見た。マンタの見た。ハンマーヘッドシャークも見たいけど、やはりジンベイザメが見たい。みんな同じ気持ちだった。ガイドもポイントの説明をするとき、ジンベイザメの話を出す。期待してエントリーする。昨日、今日と見ている限り、午後になると透明度が落ちる。ゲストのひとりが「海のピキピキ感がなくなる」と言ったのが印象的だった。ドロップオフ沿いを、みんなで移動する。少し深度を浅めにとりながら、ブルーウォーターも気にしつつ。結果はバツだった。会いたいと思って会える生物でない。そう分かっているけど期待してしまう。先週は会えたそうだ。この後、大きなマンタに出会っ

たがゲストの反応はいまいち。午前中のスノーケリングも含めて全てダイビングでマンタを見ている。ちょっと贅沢な話だ。

これを書いている今は、4本目のダイビングに行くまでのおやつタイム。いつも用意されるスポンジケーキが美味しく、少し疲れた身体が喜んでいる。

*

4本目のポイントは「Delsan Wreck(デルサンレック)」。目的はやはりジンベイザメ。エントリー後、早い潮の流れに身を任す。撮影していると、グループに置いていかれ、私はリーフの上に留まって撮影を続ける。カスマアジの大きな群れを見つけ、近づくと、まるで獲物を狙うように私を取り囲んだ。カスマアジが集団になると、時折、このような感覚を受ける。トゥバタハで初めてアオウミガメを見た。身体が大きく、のっそりと泳ぐ感じ。ダイビングの後半、イルカの声がとても近くに聞こえていたが、姿は見えぬ。結局、潮の流れに乗り続けて私のチームは、リーフから離れて戻ることが出来ず。他のクルーズ船のダイビングポイントにピックアップされていた。

目の前で「たむろ」する
カスマアジの集団は、
怖いくらいに威圧的だった



本当にすごい数だった。喰われちゃっても可笑しくはないと思った。こうなると単体のサメよりも絶対的に威圧感がある



レンジャーステーションの周囲には、こんなに美しく青い世界が広がっている

静かで穏やかな終焉

乗船5日目(5月5日)

今日はダイビングの最終日。6時半にスピードボートに乗り込み、向かった先は「Delsan Wreck(デルサンレック)」。ガイドがここはカメがとても多いと話していた。

朝日の柔らかな日差しが差し込む海のなかを泳いでいくと、本当にたくさんのカメが現れた。水面から潜降するカメ、リーフからブルーウォーターに離陸するカメ。まるでミサイルのようにあちらこちらから現れた。ドロップオフにはムレハタタテダイの群れやアヤコシウダイの群れが見られる。カスマアジがクマザサハナム口を追いかける様子はもうお馴染みなっ

た。みんなは少し深度を下げ、ハンマーヘッドなども探したが、見つけることができず。ジンベイザメとの対面も叶わなかった。ダイビングを終え、本船に帰る途中、イルカの大きな群れを見つける。まず、船先で泳ぎ始めた。みんなでスノーケリングを付け入水し、7頭くらいの群れが海底に消えさる様子を見た。なかなかうまく泳ぐことはできなかったが、水中でイルカを見ることができ、嬉しい一日の始まりとなった。

朝食の後、本船は移動し、北トゥバタハリーフの南に位置するレンジャーステーション付近で係留した。2本目に潜ったポイントは「Rangers station(レンジャーステーション)」。サンゴのリーフの合間に砂地が広がり、

癒し系の雰囲気満点。ゆっくりとした潮の流れに身を任せ、豊かなサンゴ礁の上を漂っていく。水面から飛び込む太陽の光も暖かく、「サンゴ浴」を楽しむ。見られた生物はカクレマニやタイマイなど。今回のクルーズで潜った他のポイントとの違いはそれほどないが、リラックスしてただらでいるポイントだった。

3本目。クルーズ最後のダイビングも「Rangers station」。2本目に潜ったコースの延長で潜る。たくさん潜った私はエントリーしなかったが、明るい砂地が広がる癒し系のポイントでみんな楽しめたと帰ってきた。最大水深は10mで最後のダイブを締めくくっていた。



01



02



03

01:ボートの船先に現れたイルカ
02:名残惜しみながらボートにエキジットしていくダイバー
03:まるでロケットのようにリーフから飛び出すアオウミガメ



洋上の小さな城 レンジャーステーション



01:食材も豊富に揃う
02:レンジャーの人たちの趣味? 編物?
03:半野性のアオウミガメ。甲羅が美しい
04:ランチの様子。いつもボリューム満点

ちょっとしたアクティビティー レンジャーステーション見学

大海原の環礁のなかにポツンと見えるレンジャーステーション。クルーズ中、エクサージョンとして立ち寄ることができる。名前の通りトウバタ環礁を監視する人たちの拠点となる場所で、男性6名が寝泊りしている。小さな島のような施設にお邪魔すると、まず、名簿に名前をサインし、記念のタグをもらえる。見所は、餌付けしているカメがこの施設にやってくる。透き通った水にカメの模様が美しく映る。また、レンジャーの人たちが野菜を作る小さなプランターがあり、海のど真ん中の栽培がかわいい。簡単なお土産(Tシャツ)なども売られている。



02



03



04



ダイビングを終えてのディナー。これがまた美味しい

トウバタリーフについて

ダイビングエリアのメインとなるのはトウバタリーフの北環礁と南環礁である。南トウバタリーフでは、初年度、「Ko-oK (コ オク)」という南トウバタリーフのポイントでジンベイザメに遭遇する機会に恵まれた。今年は、「Black Rock (ブラックロック)」でたくさんのマンタに遭遇することができた。ギンガメアジやバラクーダの群れに関しては、両環礁で見られたが、大物に関しては北トウバタリーフよりは南トウバタリーフのほうが遭遇率が高いように思える。北トウバタリーフの見所としては「豊かなサンゴ礁」が挙げられる。特に今回潜った北部のシャークエアポートやウォッシングマシーンの特筆もの。様々なサンゴからなる美しい景観が広がっていた。またサンゴに関しては南トウバタリーフのライトハウス付近のポイント「スタッグホーン ポイント」なども一面の枝サンゴがとても豊かに群生していた。

クルーズの食事について

今回乗船したアポエクスプローラー号も2005年に乗船のタルシー号もエビ、カニ、イカ、サカナといった海の食材を使用した料理の他、ポーク、ビーフ、チキンと肉料理も用意されていた。主食はご飯で、スープや野菜炒め、デザートなどが付く。プッフスタイルで味付けは少し濃いのが、日本人に合う料理が並ぶ。ふたつのクルーズとも日本から持ち込んだ食材を食べている人は皆無だった。また、ダイビングの間にはスポンジケーキなどが用意され、小腹が空くのを満たしてくれた。

トウバタハクルーズ&トウバタリーフについては昨年度の「GW 期間限定 世界遺産クルーズ・フィリピン トウバタリーフ・ダイブクルーズ」のPDFマガジンもごらん下さい。



トゥバタハリーフ・ダイビングの素顔と楽しみ方

私(鍵井)は、2005年と2006年にトゥバタハダイブクルーズに乗船取材する機会に恵まれた。初年度はタルーシー号、今年はアポエクスプローラーだった。タルーシー号の船体はそれほど大きくなかったが、海を身近に感じる造りで満足のいくものだった。また、アポエクスプローラーは、キャビン(客室)リビングダイニング、サンデッキ、ダイブデッキと十分なスペースがあり、16名のゲストが快適に過ごせ、楽しく航海することができた。

鍵井靖章が
2年間、トゥバタハダイブクルーズに
乗船した感想

ダイビングについて

クルーズ船の一番大切な要素となるダイビング。今回のアポエクスプローラーの場合、1グループは最大8名で、ガイドがひとり、またはアシスタントを含めて二人つく。潜水時間は最大50分で、最大水深は30M。ダイビングの最後に安全停止が義務付けられている。この2度の乗船で、実際に一緒に潜ったガイドの役割を見てみると、日本人ダイバーがイメージするダイブガイドというよりは、水先案内人という立場だった。一応、コース取りはするが、生物を見せる技量はそれほどない。トゥバタハ自体、年に3ヶ月しか潜れないエリアだから、そのハンディがあるのも事実だ。マクロの生物、またはトゥバタハで見られる珍しい生物などを教えてもらうことはまずなかった。水深などの管理もゲストダイバー個人に任されている。ガイドよりも深い深度にいても、それほど注意されることはなく、自己責任で行う。トゥバタハクルーズを楽しむゲストはある程度のダイビングスキルと計画性があるダイバーがより楽しむことができる。また、ガイドは大物を狙うスタイルでドロップオフの際ばかり潜ることが多いが、少し視点を変えて、トッピーフの豊かなサンゴ礁やサンゴの隙間に住むマクロの生物などを楽しむこともお勧めする。

トゥバタハは潮の流れに乗ってダイビングを

するドリフトダイビングである。時には潮の流れが早くなることも多い。それは大物との遭遇の可能性が高くなるので期待度も大きくなる。自分の担当になったガイドがあまり経験が豊富でない場合、ダイビング中に潮が強クリーフから離されるようなことがあれば、自ら早く決断して、浮上しようとガイドに促すことをお勧めする。また、セーフティフフロートなどの安全グッズを携帯したい。船にはレンタルがないことも多く(販売されている)、自分で用意した方が良い。またレンタル器材に関してでもできるだけ、日本から自分の器材を用意することをお勧めする。

自己管理の重要性

1日4本からナイトダイビングを含めた5本のダイビングが計画されるトゥバタハリーフでは自己管理の必要性がよりダイビングを楽しむ秘訣になる。他のエリアに比べて、安全性については少し強く述べたい。例えば、減圧症になった場合、再圧チャンパーは、マニラにしかなく。かつトゥバタハリーフがパラワン島から約10時間の航海を要する海洋上にある。トゥバタハで従事している全てのガイドがそうでないかもしれないが、正直、2回の及ぶ乗船でガイド(ヨーロッパ人と現地ガイド)の技量、判断に不安を抱いたために、あえて書かせて頂いた。

しっかりと自己管理が行なえれば、トゥバタハリーフは私たちに最高の笑顔をもたらしてくれる



01 02



- 01: ひっそりとした森の中に海底川の入り口がある
- 02: 海底川をボートで散策。ライトの照らし出された景色は興味が尽きない
- 03: 海底川はまるで長いトンネルのようだ
- 04: 美しい流線型の鍾乳洞がライト先に現れる
- 04: 公園内には、イグアナや猿も見かける



トゥバタハクルーズ周辺情報 海底川 ～もうひとつの世界遺産～ PUERTO PRINCESA SUBTERRANEAN RIVER NATIONAL PARK

鍾乳洞の世界遺産。正式名称は「PUERTO PRINCESA SUBTERRANEAN RIVER NATIONAL PARK」で、地元では「UNDER WATER RIVER (アンダーウォーターリバー)」と呼ばれている。海底川と不思議な名で呼ばれているが、その正体は鍾乳洞である。東シナ海に面した河口口にある。ただ鍾乳洞内は水で覆われ、小型ボートでの見学となる。1887年にイギリス人らに発見され、1971年3月26日に一般公開となった。1999年12月4日にユネスコ世界遺産に登録された。12月から5月までは繁忙期で1日の観光客は200～500名。6月～11月までは50名ほど。

プエルトプリンセサから車で約2時間の港からパンガーボートで20分、平坦な森の歩道を約5分。海底川対岸の岸から小型ボートに乗り込む。遊覧時間は約45分。

